

線をまたいでいいのか

深沢潮

chocojunky2000@gmail.com

境、というものを考えたとき、わたしの頭に浮かぶのは、体育の先生が小学校の校庭でラインカーを引く様子だ。ドッジボールをやる時、石灰で描かれた線によって敵味方の陣地が分けられる。線を越えることは許されない。

また、算数の先生が黒板にチョークで円を描く光景も浮かんでくる。いくつもの円は、まったく重ならなかったり、一部分が重なったりしている。引かれた線で分けられた円のなかは、共通の属性を持つ集合体。たしか、帰属関係だとか、包含関係、部分集合などという単語は中学で習ったが、なぜだかいまだによく覚えている。

わたしにとって、境、という単語は、線を引く、というイメージと結びついている。厳密にいうと、線を引かれること、だ。なぜならわたしは、この日本という国において長らく、日本人、という線からはじかれてきた、外国人、だからだ。ここで言う外国人とは、日本国籍でないということだけでなく、民族、血統という意味において、あるいはルーツが日本以外のどこにあるかという意味において。そしてそれだけでなく、在日コリアンのわたしは、祖国であるはずの韓国に行っても、言葉ができないこともあって、韓国人、という線からはじかれる。

在日文学、というジャンルがある。研究者ではない、実作者であるわたしにとって、つねづねその定義はあいまいに感じられ、正直に言うと、いまだによくわからない。在日外国人が小説を書けばすべてが在日文学になるかといえばそうでもないようだ。実際、純文学やミステリー作家のなかに、在日コリアンの属性を持っていても、決して在日作家とは呼ばれないひとびとがいることを知っている。もちろん、在日コリアンがこれまで日本語で書いてきた文学は在日文学と言われるものの方が多いのも事実だし、わたしの書いた小説は在日文学の円のなかにくぐられ、わたしは在日朝鮮人作家と呼ばれることが頻繁にある。それは在日コリアンという出自に加えて、在日コリアンのことを小説に描いているからだろう。とすると、作家の属性と作品の両方が在日性を帯びているか否かが、在日文学や在日作家と呼ばれるためには重要な要素のようだ。

とはいえ、わたし自身は在日文学や在日朝鮮人作家という分類を自意識から追い出すようにして物語を紡いでいる。それは、在日コリアンのことを描こうが、そうでなかろうが、変わらない。ゆえに、わたしの作品がつねに在日コリアンの属性と結び付けられる分析をされることを、ときどき負担に思

う。それは、「わたしは、あまり、それらしい、ふるまいができない」と自分では思っているからである。

わたしたちの暮らす社会では、ある属性を持つと、それにふさわしい所作というものが強く求められる。大学教授なら大学教授らしく、作家なら作家らしく、女なら女らしく、母親なら母親らしく、在日なら在日らしく。

そんな枷は息苦しい。そんなふるまいは、うんざりする。そもそも、在日らしさって、どんなことを指しているのか。在日朝鮮人作家らしいとか、在日文学ならではの、というのはいったいなんなのだろう。

アイデンティティに葛藤すること?民族意識を強く持つこと?差別に耐える姿を描くこと?

もちろんそういったことはわたしの描く物語のなかにあまた見られる。もしかしたら、こうして、在日コリアンというスタンプを押され、その属性の円のなかに入れられることに抵抗を感じることも自体がもっとも在日コリアンらしい感情の表出なのかもしれない。

それでもやはり、わたしは、くくられることが苦手だ。誤解を招くので言い直す。在日コリアンであることが嫌なのではない。それは紛れもない事実だ。なんであれ、くくられることに耐えられないのだ。

線を引かれ、はじかれてきたわたしは、一周まわって、「たやすく円のなかにくくられるものか」と思う気持ちが強いのもかもしれない。属性、というものに対して過剰に忌避反応があるのもかもしれない。かといって、線から離れることもできない。自分でも面倒くさい奴だとわかっている。じゃ

あ、どうしたらいいのか。

わたしは、線を踏んでいきたいのだ。

テニスもバレーボールもサッカーも、ボールが線の上であればセーフだ。しかし、別にセーフでありたいわけではない。ぎりぎり仲間に入れてくれ、ということでもない。ただ、いつも線の上において、いつでも線をまたいだり、越えたりして、分けられたどちら側にも自由自在に行ける存在でありたいだけなのだ。そして、属性から離れたわたし自身の個を大事にしたい。線の外にいさせられたわたしだからこそ、円の外に追いやられる人のことを気かけなければ。自分と違う円の人たちのことも考えなければ。さまざまな立場のひとに、共感できるようでありたい。そう思っていた。

しかし、そんな私の鬱陶しい正義感もろくも打ち崩された。もう一昨年前のことになるが、わたしは新作小説の取材のために、沖縄に行った。取材の目的は、太平洋戦争中に沖縄にいた朝鮮人慰安婦の足跡をたどるというものだった。

戦争体験を語り継いでいるご老人や、戦争体験を聞き取りしているひとたちを訪ね、朝鮮人慰安婦の目撃証言を集めた。戦地をめぐり、ガマにも入り、慰安所跡の残る離島にも足を延ばした。現地のコーディネーターは、移住10年になるナイチャー(本土の人)のフリーライターNに頼んだ。彼はわたしの大学時代の同級生だ。

わたしは、終始ウチナー(沖縄の人)の懐に入っていくように努めた。彼らもわたしが在日と打ち明けると心を開いてくれるような感触を得て、取材もスムーズだった。米国との地上戦の被害にあった戦時中から、

米国に占領された戦後、返還後も米軍基地を多く押し付けられている現在にいたるまで、日本政府から虐げられているという意味において、ウチナーの人たちと、日本の植民地だった朝鮮半島をルーツに持つ在日コリアンであるわたしのあいだには、互いに共感できることが多いような気がしていた。

取材は進み、基地反対運動の先頭に立っている(戦争体験の聞き取りをしているひとは、多くが基地反対運動を始め、平和運動の担い手だった)ひとりの女性に会った。

「沖縄へのヘイトスピーチ、ひどいですよね。わたしも在日コリアンだからバッシングはよくされます」と会うなり言った。基地反対運動にわたしも強く共感していたので、そういう発言も自然と出てきたのだと思う。すると、彼女は、「ああ、あなたのことはネットで調べたけど、バッシングされて大変なのにわざわざ慰安婦のことを書くなんて、どうして?目立ちたいの?あなたが書かなくても誰かが書くんじゃない?」と言われた。

「いえ、目立ちたいとかではなく」と言葉を濁したものの、その後の会話はよそよそしく、ぎこちない時間を過ごした。取材後に落ち込んで、コーディネーターのNに「なんだか、冷たかったよね。線を引かれたって感じ」と言うと、彼は、当たり前だよ、と応えて続けた。

「僕の実感だけど、10年いたって、ウチナーはナイチャーに線を引くよ。もちろん沖縄の人はいい人たちだよ。これまで取材した人たちだって、親切だった。だけど、在日コリアンっていったって、ウチナーにとってはナイチャーにしかすぎないよ。そ

こを軽々とそうやって、すぐに線を越えようとするのは傲慢なんじゃないの。共感って、暴力になる場合もあるからね」

わたしは、頬を張られたようにはっとした。在日コリアンという円に入れられることに抵抗があるくせに、自分で線を引いて、しかもそれを越えてウチナーの円に押し入ろうとしてしまった。簡単にわかりあおうとすることが、どんなに傲慢か、ということに気づけなかった。うぬぼれていた。同じく日本社会のなかのマイノリティである、ということを利用して、勝手にシンパシーを持つのは、失礼なことなのだ。乱暴なことなのだ。自分だって、帰国子女だという人に「在日コリアンって大変だよ、わかるよ、わかる」と言われて、いらっとしたことがあるではないか。

沖縄取材を終えて、わたしはしばらく自己嫌悪に陥り、新作小説の執筆にとりかかれずにいた。そんな折、作家であると同時に精神科医でもある帚木蓬生氏の講演を聴く機会に恵まれた。そこで、「ネガティブケイパビリティ」という概念を知り、帚木氏の著作、『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』という本を読んだ。

「『ネガティブ・ケイパビリティ(negative capability, 負の能力もしくは陰性能力)とは、『どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力』をさします。あるいは、『性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力』を意味します』」

ページを読み進めていくと、だんだんともやもやが晴れていった。この概念は、18世紀の詩人ジョン・キーツにより提唱されたもので、ネガティブ・ケイパビリティと

は、簡単に「わかった」とか、「理解した」つもりになろうとしないこと、だということだ。脳はもともと、無理にでもわかろうとする仕組みになっているから、それに耐えて抗うべきで、そうすることで対象の本質に迫り、これが深い思考を導き、相手が人間なら、相手を本当に思いやる共感に至る手立てだと書かれている。

つまり、私なりに解釈すると、線の上で踏みとどまることが大事だということ。自分の線の上にはいてもいいし、そこから離れようとまた近づこうと勝手だが、ほかの人の線を簡単にまたいだりはいけない、ということだ。

いまわたしは、簡単に線をまたいだり越えたりせずに、ネガティブ・ケイパビリティを駆使して線の上に踏みとどまらなければならないと、自分を厳しく戒めている。そして、線の上に踏みとどまる手段というのが、まさに小説を書くことそのものではないかと信じて、原稿に向きあっている。

深沢潮 Ushio FUKAZAWA

(日本)在日コリアン作家。2012年『金江のおばさん』で、第11回「女による女のためのR-18文学賞」大賞受賞。主著に『縁を結う人』(東京：新潮文庫, 2016)、『ひとかどの父へ』(東京：朝日文庫, 2018)、『海を抱いて月に眠る』(東京：文藝春秋, 2018)、『緑と赤』(日本：小学館文庫, 2019)など。